

ゴーヤ外交

首藤 静夫

台風の襲来とともに今年のゴーヤ栽培が終了した。わずか二株で八十本採れたからまずまずといえる。これまでは裏庭で育てていたが隣地に家が建ち、日が射さなくなった。思い切って玄関側の狭い庭に場所を移した。ネットを垣根から二階ベランダまで張り、地面に二株を植えた。

今年は五月の猛暑が効いた。苗は順調に生育し、沢山の花をつけ、実をつけ、七月に入ると収穫が始まった。実は夜のうちに大きくなるようで、瑞々しいのを毎朝二つ、三つと摘む。

ここまでが僕の仕事だ。妻は待っていましたとばかりご近所に毎朝配る。僕らが住む川崎市の二子のあたりは、まだ路地裏の、回覧板の文化だ。どのお宅も季節の花や野菜を庭先に育てている。ゴーヤを配れば、何らかのお返しがある。そのまま井戸端会議となり妻は帰ってこない。

時に思わぬお返しも頂く。向かいのお宅からは、ゴーヤ三本のお返しに立派な白桃を二つ、別のお宅からはシャインマスカット一房が後で届きびっくりした。お裾分けにというが、恐縮至極である（内心はうれしいが）。

会社時代の友人がいよいよ重職を退任し、奥方とスーパーに行ったそうだ。葡萄好きの彼がシャインマスカットを籠にいれたら奥方がそとと棚にかえた。癪になった彼が別種の葡萄二房を籠に入れたら、いつの間にか一つ減らされていたと苦笑していた。それを思い出しつつ賞味した。

生り物の盛んな季節なので、色々の野菜や果物が路地を隔てて毎朝のように飛び交う。配った回数、いただいた回数の訳がわからなくなる。当方はゴーヤ外交のつもりでも先様はキウリ外交、トマト外交をしているのかも知れない。

八月半ば。秋風とともにゴーヤも後半ないし終盤である。追加の肥料なども効き目が薄い。実の育ちが遅い、変形・変色も多い。外交に使えなくなったところで幕引きをした。二本の太い茎に根元近く剪定鋏を入れる、ある淋しさを感じながら。

次は菊外交。菊の蕾がうつすら色づいてきた。